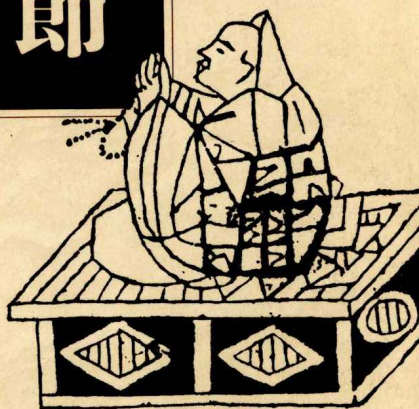




藤掛和美

説経節 の世界

千秋万ぜいのエレジー



ぺりかん社

藤掛和美

説経節
の
世界

秋万ぜいのエレジー

ぺりかん社

著者略歴

藤掛和美 (ふじかけ かずよし)

昭和13年(1938)生まれ。名古屋大学文学部卒業。

中部大学女子短期大学日本語日本文化学科教授。

専攻・近世初期文芸。

主編著書——『お伽草子入門』(編)和泉書院,『室町
期物語の近世的展開』(著)和泉書院,『御伽草子総
索引』(共編)笠間書院,『今鏡本文及び総索引』(共
編)笠間書院,『国語授業論の新生』(著)和泉書院,
『鑑賞と創作・悲劇人の系譜』(編著)和泉書院。

説経節の世界 | 1993年4月20日 初版第1刷発行

©1993 著 者 藤 掛 和 美

発行者 救仁郷 建

発行所 株式会社ペリかん社

〒113 東京都文京区本郷2-24-4

振替・東京0—48881 TEL 03(3814)8515

印刷・スマイル企画+平河工業社

製本・小高製本工業

Printed in Japan | ISBN4-8315-0590-0

はじめに

本書の書名を『説経節の世界』としたが、「説経節（せつきょうぶし）」は「説経」とも「説経浄瑠璃」とも称される。これら三者の中で「説経」は、仏教の世界で僧が説く「説教」と区別して用いられる。また「説経」は「説経節（説経浄瑠璃）」を語る人」の意も含んでいる。本書では、「説教」との混同を避け、また音曲のニュアンスが強い「浄瑠璃」呼称も避けて、「説経節」の名称を用いることにする。

「説経節」は、「――節」「――浄瑠璃」と称されることからわかるように、本来は「語り」の芸能である。本書において取り扱う「作品」は、これら「語り物」を文字化した詞章、即ち「正本（語りのテキスト）」である。したがって厳密には、「説経正本による作品論」というべきであろうが、これまでも平家物語に代表される「語り物」が「文学論」として扱われる時には、「文字表現」によって現在に残された詞章を研究対象とせざるを得ないように、本書も現存する「説経正本」の詞章についての「説経節論」であることを断っておく。

説経節は、中世末から近世初期にかけて流行したが、「説経節」というテクニカルチームを持つに至るまでの経過は未だ不明な点が多い。初期の段階において、諸国を遍歴した時宗僧や熊野比丘尼の唱導「説教」であつたものが、中世末桃山期という新興芸術・新興芸能の発展期において、徐々に芸

能化の道をたどったものと考えられる。その後、やはりその頃に物語化を果たし、次第に人気が出始めていた「浄瑠璃」、即ち矢作^{やはぎ}の宿の遊女浄瑠璃御前と源義経の恋物語である「浄瑠璃御前の物語」を略称した新興語り物の影響を受けて成長したと思われる。「説経浄瑠璃」という呼称は、その影響の故であろう。

初期の説経節の語り手は、「ささら説経」と呼ばれ、^{せしやう}莚の上に大きな傘を立てて、その下でささらを摺りながら説経節を語った。慶長年中の風俗を描いたものとして現在に残されている『尾州家本歌舞伎絵巻』では、町の辻で語っているのであるが、おそらく、祭礼の際には神社で、仏事で人が集まる際にはお寺で、境内の片隅に莚を敷いて人々に取り巻かれながら語られたのだろう。

このように初期のころには野外芸能であった説経節が江戸時代に入ると、芝居小屋にかけられた「浄瑠璃（古浄瑠璃）」に追隨して、やはり芝居小屋に進出し、操り人形も用いて語られるようになる。そして、説経与七郎とか佐渡七太夫とかの名前を持った説経師が出現し、彼らが自分の語りの正本を持つようになる。「語り」が文字によって残され、彼らは権威を持つて自分たちの弟子にその語りを正本として伝える。そしてさらにそれらの正本は、人々の「語り物」への要求に応じて、当時の出版ブームにのりながら刊行され発売される。それらの多くは散逸したであろうが、今になお数十本に及ぶ正本が残される。

現存するこれらの正本のほとんどが、横山重氏編『説経正本集』（角川書店刊、全三巻）に翻刻して収められる。これらの中で代表的な説経節は、古くから語られた「荊萱」「山椒太夫」「信徳丸」「小栗

判官」などで、いわゆる「古説経」と称されている。

説経節は江戸の中期に衰退していくのであるが、これらの古い説経節は浄瑠璃や歌舞伎に取り込まれ新たに翻案されて演じられた。したがって、芸能の世界においては、変貌しながらも名残をとどめて人々に知られてきた。それに比して、これらの説経節が「文芸」として、人々に読まれるようになった歴史は新しい。

荒木繁・山本吉左右氏編注『説経節』（平凡社刊・東洋文庫）が刊行されたのは昭和四十八年のことであつたが、この時初めて「説経節（正本）」に注解がなされたのであつた。そして昭和五十二年に室木弥太郎氏校注『説経集』（新潮日本古典集成）が刊行された。また室木氏は、『説経集』刊行に先立つて『語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』を上梓されたが、これらの刊行によって、「説経節」の「文学的研究」は大きく進展したと言えよう。本書もこれらの成果に負うところが大きい。

本書の副題を「千秋万ぜいのエレジー」としたのは、以上に見てきた説経正本の詞章に焦点を当てて、その表現位相を私なりに読み取ることによって、中世末に語られ始め一時の栄華を極めながら、徳川幕藩体制の確立する中で衰退して行く「説経節」の運命について論じることを、本書の主目的においたからである。

日本の文化史上においてさまざまなジャンルの芸能があり、文芸作品が存在してきた。古代から中世に至るまでそれらの多くは身分的上位者のものであつた。「説経節」発生期の中世において諸国を遍歴しながらその語りを運んだ人々が、近世に入つて身分制度が確立するなかで、定住を強いられ身

分的下位者に位置づけられてしまう。彼らは自分たちの芸能をなんとか存続させようとするのだが、しかしその努力もむなしく「説経節」はエレジーを奏でたのであった。

本書は、歴史社会的な視野に立つての「文学表現の位相」からアプローチした「説経節論」である。私の拙い諸論考が、「説経節」を庄殺した差別の構造を、そして「説経節」の奏でるエレジーを、現代の人々の心にいささかなりとも訴え、響かせることができることを期待したいのだが……。

説経節の世界*
目次

はじめに 1

序章 説経節と漂泊民の運命

——あらいたはしや千秋万ぜいのエレジー——

1 説経節の中の「あらいたはしや」10

2 説経節の中の「千秋万ぜい」15

3 あらいたはしや千秋万ぜいのエレジー 21

第一章 説経節における「道行文」の位相

——峠越え辿る細道驕道——

1 「道行文」とは 28

2 説経節の「道行文」30

3 説経節以外の「道行文」37

4 道行文から見た説経節の世界 44

第二章 説経節における「申し子」の位相

——命にかへ子種授け給へ——

1 「申し子」とは 52

2 「申し子譚」一覧 55

3 「申し子」の意味とその系譜 70

4 「申し子譚」に見られる説経節の位相 73

第三章 説経「まつら長者」の位相

——聖と賤と漂泊と

1 問題の所在 83

2 「褶袖伝説」と「生贄伝説」 85

3 「さよひめ物語」の現存本 90

4 説経『まつら長者』の位相 94

5 人柱・大蛇「怨念」の行くえ 107

第四章 説経「さんせう太夫」の位相

——安寿悲しやいたはしや

1 説経「さんせう太夫」の多用語 112

2 説経「さんせう太夫」の位相 117

3 現代における説経「さんせう太夫」の意義 128

第五章 説経「かるかや」の位相

——道心なにゆゑの出家遁世ぞや

1 現存の荻萱伝承 133

2 現存する荻萱伝承作品 139

3 現存説経正本集の「かるかや」の位置 141

4 「せつきやうかるかや」の特徴語 146

5 「せつきやうかるかや」の位相 150

6 「道心」「聖」「上人」 156

7 現代女子大生の「かるかや」観 161

第六章 説経節の擬声語・擬態語

——鰯口ちやうどうち鳴らし

1 説経節と周辺作品の擬声語・擬態語 165

2 各ジャンルの擬声語・擬態語の主な特徴 176

3 説経節と幸若舞との擬声語・擬態語の比較 178

4 説経節の擬声語・擬態語の決まり文句について 185

5 まとめ 189

終章 説経「あいごの若」の位相

——去るか細工逝くか愛護名残惜しや

1 『近江国輿地志略』の愛護若譚 193

2 「あいごの若」正本の位置 196

3 「あいごの若」宗教性の位相 198

4 「あいごの若」賤性の位相 208

5 「あいごの若」と説経の運命 215

6 浄瑠璃「都の富士」の出現 220

7 説経「あいごの若」鎮魂 229

あとがき 233

序章 説経節と漂泊民の運命

——あらいたはしや千秋万ぜいのエレジー——

いたはしや浮世のすみに天満ぶし

『喜遊笑覧』にも引かれた、宝暦十年（二七六〇）刊の冠付『風俗陀羅尼』の中の一句で、説経節の衰退を揶揄した句として有名である。

「天満ぶし（節）」とは、万治・寛文年間を中心に江戸で活躍した説経の第一人者、天満八太夫の曲節のことを示し、「いたはしや」とは、説経節の中に頻繁に用いられる表現である。即ち、江戸初期にあつては、古浄瑠璃とともに極めて人気の高かった説経節が、宝暦年間に至って「浮世のすみ」に追いやられてしまった状態を、「いたはしや」ともじつたのであつた。本序章において、①「いたはしや」を説経節の世界を象徴するキーワードとして確認し、さらに新たに、多くの説経節の末尾部に見られる「千秋万ぜい」という表現に注目し、これを説経節のもう一つのキーワードとして把握する。そして、②これら二つのキーワードが、説経節の歴史の中で推移することに注目しながら、両語の意味の差異を止揚することによって、説経節とその担い手であつた漂泊民との運命を、ことに徳川幕藩

体制確立期に視座を据えて概観しておく。

1 説経節の中の「あらいたはしや」

○あらいたはしやきやうだいは、鎌と杓あきと桶と柄杓を受け取りて、山と浜とにござあるが、あらいたはしやな姉御様は、とある所に立ちやすらひ、桶と柄杓をからりと捨て、山の方を打ちながめ、「さて自らは、この目の前に見えたる、多い潮さへえくまぬに、(弟は)鎌手取つたることはなし。手元覚えず手や切りて、峰のあらしが激しうて、さぞ寒かるらう悲しや」と、姉は嘆かせたまふなり。

○あらいたはしやなつし王殿は、門外へ立ち出でて、姉御様をお待ちある。あらいたはしやな姉御様。すそは潮風、そでは涙にしよほぬれて、桶をかついておもどりある。御衣ぎよいのたもとにすがりつき、「なうなう、いかに姉御様。さてそれがしは、けふの柴をばえ刈らいで、里の山人たちの情けに刈つてたまはりたを、(中略)十荷刈れとよ姉御様。三荷にわびてたまはれの」。

説経節の中で最も有名な「山椒太夫」の中の一節である。人買い山岡太夫にしくまれて、母と別れ別れにさせられた安寿と厨子王は、丹後の国由良の山椒太夫に売られる。そしてその子三郎にひどい仕打ちを受ける。弟厨子王を逃がさんとする安寿の計画が三郎に知れて、二人は拷問を受けるが、その残忍さは目をおおいたくなるほどである。第六章でも述べるように、「じりりじつと」焼き金で安

寿の美しい顔を焼き、三つ目の錐で「からりからりと」膝の骨に穴を揉みあける等のむごさが迫真的に、擬声語・擬態語を巧みに用いて描かれる。

これら安寿と厨子王とが悲劇的な状態に陥っている場面に、二人の境遇に同情して、「(あら) いたはしやきやうだいは……」「(あら) いたはしや姉御様……」「(あら) いたはしや厨子王は……」等が、頻繁に表現される。新潮日本古典集成『説経集』所収「さんせう太夫」(寛永末年頃刊、さうしや長兵衛版。説経与七郎正本)には、二十九個所「(あら) いたはしや……」が表現されているが、二人が山椒太夫の屋敷で虐待を受け、やがて安寿が殺され、厨子王が何とか脱出に成功する場面においては、半数以上に相当する十八個所が用いられている。このように、説経節には、主人公が一旦悲劇のどん底に陥って、その後成功、再び栄華に栄えるという話の展開が多いが、悲劇の場面に主人公を中心にその登場人物に対して、「(あら) いたはしや……」が多用され、語り物としての一種のリズムを奏でている。

新潮日本古典集成『説経集』に採られる「かるかや」「さんせう太夫」「しんとく丸」「をぐり」「あいの若」(以上は、近世初期において、いわゆる五説経と称された)、それに「まつら長者」の六作品について、「(あら) いたはしや……」を、それが対象とする人物で整理して抜き出してみると次の様である。

〈かるかや〉(底本、寛永八年卯月刊、しやうるりや喜衛門版)

○あらいたはしや石童丸は(六) ♪御台は(二) ♪二人の人々は(母と石童丸)(二)

○いたはしや道念坊は(二)

○石童丸はきこしめし、あらいたはしや、塚のほとりに倒れ伏し(二) 合計 十一個所

〈さんせう太夫〉(底本、前述)

○あらいたはしやつし王殿は(六) ♪きやうだいは(二) ♪御台所(二)

○あらいたはしやなつし王殿は(五) ♪姉御様(五) ♪きやうだい(の人々)は(二) ♪四人の

人々は(二)

○いたはしやつし王殿は(二) ♪姉御様は(二) ♪お聖様は(二) ♪姫君のたぶさを取つて(二)

♪姫君の、丈と等せの黒髪を(二) 合計二十九個所

〈しんとく丸〉(底本、佐渡七太夫正本。正保五年刊、京二条通九兵衛版)

○あらいたはしや乙姫は(二) ♪若君は(三三) ♪仲光は(二)

○いたはしやしんとく丸は(二) ♪仲光は(二) ♪信吉殿(二)

○いたはしうは存ずれども(二) 合計 十一個所

〈をぐり〉(底本、寛永後期、明暦ごろ写の絵巻)

○あらいたはしや照手の姫は(二) ♪兄弟は(二)

○あらいたはしやな照手の姫は(を)(三三) ♪照手様(二) 合計 八個所

〈あいごの若〉(底本、寛文十年ごろ刊、江戸版、天満八太夫正本カ)

○いたはしや若君(を)(十四) ♪若君(様)(二) ♪藏人殿(二) ♪姫君様(二) ♪伯父の御坊・

清平殿(二)

○さて(も)さて(も)いたはしや(二) 合計 二十一個所

〈まつら長者〉(底本、寛文元年五月刊、山本九兵衛版)

○あらいたはしや姫君は(二) ヲさよ姫は(二) ヲ御台所(二) ヲ屋形には(二)

○あらいたはしやの姫の心かな(二)

○いたはしや姫君(を)(二) ヲさよ姫は(六) ヲ母上は(二) ヲお御台は(二)

○余りのことのいたはしさに(二) 思いやられていたはしや(二) 合計 十九個所

以上に見たように説経節のほとんどの作品に「あらいたはしや」が頻出する。それらは、「あらいたはしや(な)」の(一)部が、有る表現と無い表現、また部に入る人物が、同一人物でも場面によって異なった名称で用いられる等の変化を見せて表現されている。それぞれの曲節の語り手の語りぐせとか、語りの場面における雰囲気とか、また作品世界の悲劇的な内容の多少によって差異が生ずると思われるが、総じて、「あらいたはしや(な)」から「いたはしや」に推移していることに気づかせられる。

「いたはし」の語源は「イタは痛。イタハリと同根。いたわりたいという気持」(『岩波古語辞典』)とされ、『日本国語大辞典』には、①(困難なことで)骨がおれて苦しい。(重大なことで)心配だ。気苦勞だ。きづかわしい。②病気で苦しい。気分が悪くて悩ましい。③大事なものとして重んじたい。いたわって大切にしたい。④(他人の状態に対して)心の痛むさま。あわれみを感じるさま。気の毒だ。

ふびんだ。いたいたしい——の意があげられている。説経節に用いられる「いたはし」の意は、すべて④の意に相当する。『日本国語大辞典』の例文は、①②③が比較的古いもので「書紀」「万葉」「源氏」「方丈記」「平家」から採られ、④には、「太平記」「史記抄」「謡曲」「狂言」「浄瑠璃」からの例文が引かれている。他の辞書類には④の意に「万葉」（小学館新選古語辞典）、「蜻蛉」（広辞苑）、「枕草子」（新潮国語辞典）、「狭衣」（旺文社古語辞典）、「お伽草子」（三省堂明解古語辞典）等の例文も引かれている。したがって中古においても、④の意で用いられたことがわかるが、自分と肉親関係のない他者の悲劇的狀況に対して「あわれみを感じ」「気の毒だ」とする意は、身分的な差別構造に対する意識が、より自覚的になった時に生じるものであり、日本においては中世という階級的価値観の意識変革期を経て以後多用されうる表現だと思われる。現代語の意味としての「いたはし」は、①②③の意をなくしている。その意味で、『日本国語大辞典』の例文として中世期の作品が多いのは、「いたはし」の意が、中世期の社会構造の変化の中で新たな展開をみせたことを示している。説経節の例文はそこには引かれていないけれども、これまで見て来たように、④の意は説経節においてこそ代表される意だと言える。

「あら」いたはしや」は説経節のキーワードとして確認できるが、その際、このキーワードには、中世以前には、社会的に極めて劣悪な状態におかれながら、その状態を当然のこととして「いたはしく悲劇的」と意識されることすらなかった人々に対し、「あら」いたはしや」と共感し合う。そこに階級的な価値基準の不合理性に対して反撥と疑問とを生じさせる意識が芽生えていることを把む必要